文化庁委託　日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業

北海道胆振地域

日本語学習支援者養成・研修カリキュラム開発事業

教　材

事業実施期間

令和３年6月(契約締結日)～令和4年3月18日

実施団体

学校法人　北斗文化学園

目 次

1. 研修の全体構造 2

2. 研修教材について 4

2.1　共通教材「そだねーファイル」について 4

2.2　「予習シート」「ふりかえりシート」「復習シート」の内容 4

⑴第 1 回講座 「外国人と共に暮らす社会とは何か」 4

⑵第2回講座 「多文化コミュニケーションー相互理解に向けて」 5

⑶第3回講座 「私たちのことばと地域(方言、アイヌ語を含む言語の多様性)」 5

⑷第 4 回講座 「外国人とのコミュニケーション」 6

⑸第 5 回講座 「多文化共生の地域づくりに向けて」 7

2.3　研修の流れと使用教材【一部】 7

⑴第 1 回講座「外国人と共に暮らす社会とは何か」 7

⑵第 2 回講座「多文化コミュニケーション―相互理解に向けて―」 9

⑶第3回講座「「私たちのことばと地域（方言、アイヌ語を含む言語の多様性）」 14

⑷第4回講座「「外国人とのコミュニケーション」 18

⑸第 5 回講座「多文化共生の地域づくりに向けて」 21

3. 受講生の講座運営に対する反応、評価 26

⑴ワークショップ形式の講座への反応 26

⑵「ふりかえり」教材を重視した研修の成果 28

4. 課題と展望 29

1. 研修の全体構造

本事業の『報告書』15頁にある表 2 をここで改めて確認する。

北斗文化学園　2021年度（7月～2月）

令和3年度　文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」

――胆振地域（室蘭市、伊達市、苫小牧市）での研修カリキュラム――

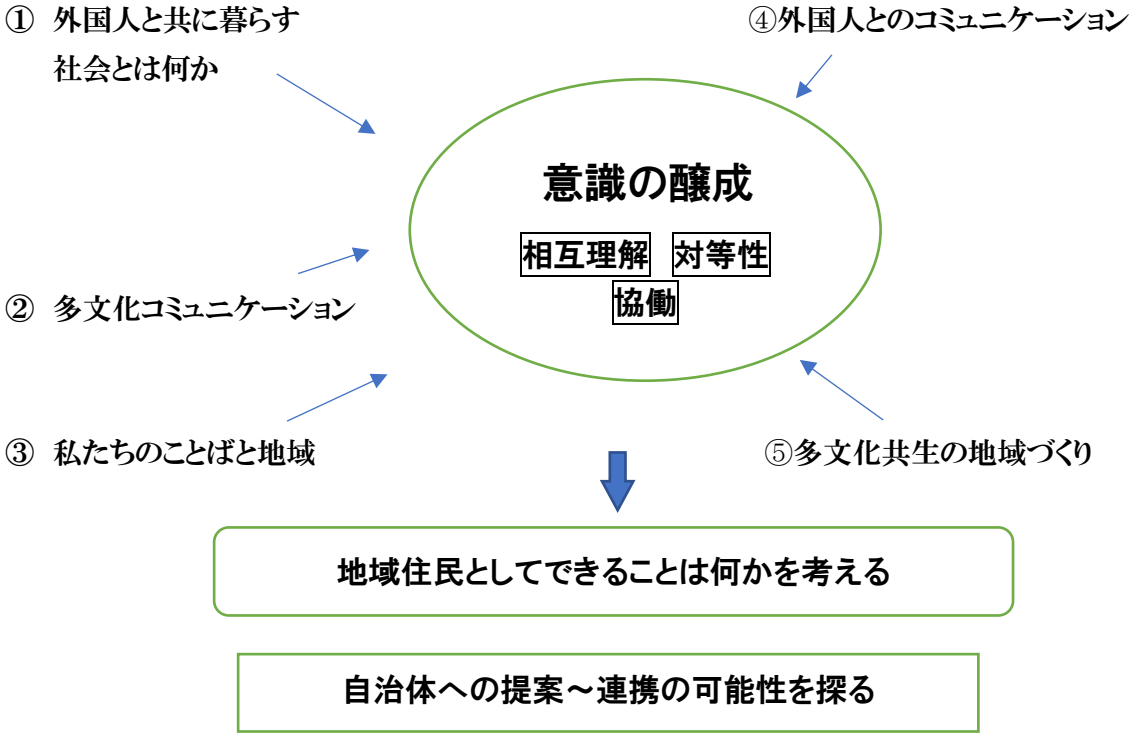
回	時間	テーマ	教育内容　***注1**	求められる資質・能力***注2**		
				知識	技能	態度
1	3時間 13:00～ 16:00 以下同じ	**外国人と共に暮らす社会とは何か**	⑴地域の居住外国人の状況、日本語教育の状況、在留資格／地域、国の政策の変遷、政治と法律の動き等 ⑵（地域の多文化共生施策）地域日本語教育の実施状況～実施地域の事例から	1,2,3	3	1,2
2	3時間	**多文化コミュニケーション～相互理解に向けて**	⑷異文化理解とコミュニケーション ⑺コミュニケーション教育 ――日本語学習支援と文化理解をめざすコミュニケーションのあり方	4	3	2,5
3	3時間	**私たちのことばと地域（方言・アイヌ語）**	⑶コミュニケーションストラテジー 　地域の「ことば」（方言、アイヌ語等） ⑻日本語の構造、相対的な視点 コミュニケーションのための日本語の特徴―日本語の多様性	4,5	1,2	2,5
4	3時間	**外国人とのコミュニケーション**	⑶コミュニケーションストラテジー ――「やさしい日本語」、発話調整 ⑹日本語学習支援――発話調整／傾聴／学習支援の流れ／学習支援のリソース	4,5	1,2	2,4,5
5	3時間	**多文化共生の地域づくり**	⑵多文化共生の定義／地域の施策／生活者としての外国人に対する日本語教育 ⑸地域日本語教室の多様性～地域日本語教室の活動事例／学習者及び支援者との交流（学習支援活動演習）	1,2	3,4	3,4,5

注 1：文化庁報告書 p.61、表 22 の「日本語学習支援者研修の教育内容」に基づく。

注2：文化庁報告書 p.34、表 11「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」に基づく。

今回の研修は多文化共生社会に向けての住民の意識啓発に重きを置いたため、目標を「意識の醸成」、とりわけ、「相互理解」「対等性」「協働」の意識を各講座で浸透させることにした。図式化すると、以下のようになる。

研修内容（5 回の講座）と目標



各講座では、講師による講義、事例紹介を受けてグループワーク、ペアワークによる協働作業が行なわれる。そして、グループごとの発表（個人が代表して）、講師によるフィードバック（情報提供、質問への回答など）が行われる流れになる。講座のテーマにより進め方は多少異なるが、各講座に共通する教材として「そだねーファイル」（「ふりかえり」ノートを中心にした学習ファイル）が使用された。

「そだねーファイル」は、北海道出身のスポーツ選手が使用して知られた「そだねー」（そうだね～同意、共感するときの表現）からヒントを得たもので、講座内、および日常生活で学びをふりかえり、経験とつなげ、実感を積み重ねてもらう目的で考えられた。次節で詳しく述べるが、各講座に「予習シート」「ふりかえりシート」「復習シート」からなる「そだねーファイル」により、講座内容を自律的に学ぶ姿勢、日常生活上のふりかえり行為の促進、経験と結びついた学びの獲得に効果があったと思われる。

2. 研修教材について

2.1　共通教材「そだねーファイル」について

① 目的：「相互理解」「対等性」「協働」への気づきを促し、市民生活へ応用、実践を行なう。（各講座で思ったこと、感じたこと、日常生活で確認できたことなどを記録）

② 形式：A4 ファイル（2 穴式）

③ 提出方法：毎回の講座後、提出 ⇒ 5 回目の講座で参加者の経験を共有

④ 内容：

○【予習】シート：次の講座のテーマに関するイメージを書く。(2 回目以降)

○【ふりかえり】シート：各講座のふりかえり(1 回目～5 回目)

(少し具体的な質問項目も与える~相互理解、対等性などのキーワードも意識し)

○【復習】シート：受講した講座の内容を受けて、日常生活で確認できたこと、気づいたことを書く(各回共通)。その他の質問(2 点)も講座担当者が加える。(5 回目はなし)

【「そだねーファイル」――表紙にある説明】

> そだねーファイル　この講座では市民のみなさんが外国人とともに暮らす社会について考え、「相互理解」「対等」「協働」について学びます。 この「そだねーファイル」は受講者のみなさんが気付いたことを記録していく ファイルです。 各講座で思ったこと、感じたことなどを自由に書いてください。 全 5 回の講座の最後で、みなさんの感想を共有する予定です。

2.2　「予習シート」「ふりかえりシート」「復習シート」の内容

(1) 第 1 回講座 「外国人と共に暮らす社会とは何か」

【ふりかえりシート】

1. どんな発見がありましたか。
2. 自分が思っていたことと、違ったことは何ですか。
3. 何かできそうな気になりましたか。

【復習シート】

1. 第1回目の講座の後、地域の状況について確認できたことや気づいたことを書いてください。
2. 身近な外国人には、どんな人がいるかこれまでの経験から思い浮かべてください。
3. 外国人がこの地域で生活するときにどんな難しさがあると思いますか。 また日本人ならそれほど難しくなくても、彼らにとっては難しいことは何だと思いますか。

(2) 第2回講座 「多文化コミュニケーションー相互理解に向けて」

【予習シート】

あなたは地域の国際交流会で初めて会った外国人と、どんな会話をするでしょうか。例のように、その外国人の出身国／地域を一つ想定して、質問文を 10、日本語で書いてください。[例：(相手の出身国／地域：ロシア)「素敵な服ですね。ロシアの民族衣装ですか。」

【ふりかえりシート】

1. あなたのこれまでのコミュニケーションで、自分の価値観やコミュニケーション・スタイルについて、気づいたことを書いてください。
2. 多様な価値観の人々と相互理解するためには、どんなことが大切だと思いますか。

【復習シート】

1. 第2回目の講座の後、地域の状況について確認できたことや気づいたことを書いてください。
2. 自分のステレオタイプや価値観について気づきましたか。
3. これからコミュニケーションをするとき、何に気をつけようと思いましたか。

(3) 第3回講座 「私たちのことばと地域（方言、アイヌ語を含む言語の多様性）」

【予習シート】

1. 言語や日本語についての意見や理論で、同意するものに○、そう思わないなら×、どちらとも言えないなら？を[　]内に記入してください。(1)と(3)の(　)に数を入れてください。

① [　　]世界にはおよそ(　　)の言語がある。
② [　　]世界には文法のない言語がある。
③ [　　]日本語は世界の言語で(　　)番目に母語話者の人口が多い。
④ [　　]英語やフランス語に比べて、日本語は曖昧で非論理的である。
⑤ [　　]日本語は難しい言語である。
⑥ [　　]日本語は特殊な言語である。
⑦ [　　]英語は難しい言語である。

2. 研修で使用される「そだねーファイル」の「そだねー」は 2018 年の平昌オリンピックを機にその存在を広く知られるようになり、2018 年の「ユーキャン新語・流行語大賞」の年間大賞を受賞しました。暖かい、素朴な響きを持つこの言葉は、親しみがわく北海道弁として全国で話題になりました。一方で、北海道弁ではないと違和感を持つ人もいるようです。あなたはどう思いますか。該当する番号を〇で囲んでください。

1. 北海道弁だと思う。　2. 北海道弁だと思わない。　3. わからない。

コメント欄（自由記述）：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3．北海道方言について

「おばんでした。はい、もしもし、XX 商事でした。」

このような言い方をあなたはしますか。該当する番号を〇で囲んでください。

1． 使う。 2．昔は使ったが、今は使わない。 3．使わないが、聞いたことがある

4．聞いたことがない。

コメント欄（自由記述）：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【ふりかえりシート】

1．講座を受ける前と後で、日本語に対する認識は変わりましたか。 新たに気づいたこと、再認識したことなどを、自由に書いてください。

2．ことばの多様性ということについて、あなたの考えを述べてください。

参考：方言、標準語、日本語、外国語、ことばの変化と乱れなど。

【復習シート】

1．第3回目の講座を受けて、日常生活で確認できたことや気づいたことを書いてください。

2．相互理解にとって一番大事なことは何だと思いますか。

3．さらに、日本語について学ぶとすればどんなことを学びたいですか。

（4） 第 4 回講座 「外国人とのコミュニケーション」

【予習シート】

1．外国人にとって日本語のどんなところが難しいと思いますか。

2．外国人と日本語で話したことがありますか。

□ ある➡話すとき、どんなことに気を付けたか、書いてください。

□ ない➡もし話すとしたら、どんなことに気を付けたらいいと思うか、書いてください。

【ふりかえりシート】

1．外国人とのコミュニケーションにとって大切なことは何だと思いますか。

2.「やさしい日本語」で重要なことは何だと思いますか。

3．今回の講座を受けて、新たに気づいたことがありましたか。

【復習シート】

1．第4回目の講座を受けて、日常生活で確認できたことや気づいたことを書いてください。

2．身の回りで「やさしい日本語」にした方がいいと思うものを書いてください。

3．周りの人（国籍不問）とのやり取りで、気をつけるようになったことはありますか。

(5) 第 5 回講座 「多文化共生の地域づくりに向けて」

【予習シート】

1. 2006 年の総務省による「地域における多文化共生の推進に向けて」(総務省 HP 『多文化共生の推進に関する研究会報告』第 1 章において、「多文化共生」の定義がどう捉えられているか、確認しておいてください。

2. 次の「対等性」と「コミュニケーション」に関する二つのアンケート項目に対し、あなたはどう回答しますか。

⑴「日本に住む外国人の権利や生活支援体制に関して、外国人も日本人と同等の待遇や権利を持つべきだと思う。」

①そう思う ②ややそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない

⑵「今後、日本に住む外国人を支援するボランティア活動(交流事業)に参加したいか。」

①参加したい ②どちらかというと参加したい ③あまり参加したくない ④参加したくない

【ふりかえりシート】

1. 市役所の外国人職員の方と話して、何か気づいたこと、新たな発見がありましたか。

2. 外国人住民と日本人住民の共生を目指す地域づくりのために、何ができるか考えてみましょう。

3. この地域に相応しい共生社会のために、「相互理解」「対等性」「協働」というキーワードを念頭に置きながら、具体的な活動を考えてみましょう。

2.3 研修の流れと使用教材【一部】

(1) 第 1 回講座「外国人と共に暮らす社会とは何か」

(担当者:北海道大学大学院経済学研究科研究員 湯山英子)

目 標: 胆振地域に住む外国人への理解を深める。
地域における外国人支援活動の事例から多文化共生を考える。

キーワード: 外国人居住者の背景、多文化共生社会、相互理解、協働

時間配分	講座内容	活動形態	教材、資料
(I) 13:10 ～	研修概要、方法等説明 自己紹介 学習者の背景(*1) 【在留資格、国籍等】 外国人就労者 監理団体・技能実習機構	講義 グループワーク クイズ、講義 動画視聴	フライヤー、そだねーファイルほか 配布資料、PPT 新聞記事 映像資料(*2)

(II) 14:20 ～	(10 分休憩後) 学習者への日本語支援 日本語教室事例	動画視聴 講義	映像資料(*3) PPT
(III) 15:30 ～	(10 分休憩後) 意見交換～発表 学習内容の確認	グループワーク 個人作業	ふりかえりシート 復習シートは次回までの課題

*注 1： 室蘭では、胆振地域全体と室蘭市在住の外国人の背景に関する情報、伊達市、苫小牧市においても同様に全体、個別の状況を理解してもらう。

*注 2： 胆振地域を含む道内の技能実習生(ベトナム人を中心に)を紹介した映像。

*注 3： 北海道の事例(函館市、紋別市)――日本語教室紹介

【配布資料】(一部)

外国人とともに暮らす社会について考える講座：室蘭

・学習者の背景
・地域社会との関わり

2021 年 7 月 10 日

湯山英子

y.yama.eiko@gmail.com

本報告の内容

●自己紹介
●学習者の背景＜北海道＞
・どんな人たちがいるの？【国別】
・どんな資格で働いているの？【在留資格別】
●技能実習生とベトナム人
●新聞記事から【英国コンテナ事件から根室】
●北海道の事例【紋別市・函館市】
●山形市と仙台市の日本語学習会に参加して
●それぞれの役割「出来ることから」

室蘭では、在留資格「留学生」が60％を占めるが、道内全体では「技能実習生」が外国人の中で最も多いこと、その中でも全体的にベトナム人在住者が増えていることの説明がなされ、現場で就労する外国人の状況が映像で紹介された。一方、伊達市では「技能実習生」が60％近く居住し、苫小牧市では永住者、特別永住者も比較的多く、長年地域に在住する外国人が多いことも説明された。具体的な数字資料、映像資料が示されたことで、受講者には実態がわかりやすく伝わったと思われる。

また、道内の一部の市町で、また東北地方の仙台市、山形市で市民と自治体の協力で実施された日本語学習会の様子が紹介され、各地で徐々に広まる外国人支援の状況が示された。

時間配分（予定）

<前半>
13:00～13:40 講義【映像の視聴：8分】13:40～14:00 ペア：「受講の目的」であいさつ
キーワードを見せ合う。
<後半>休憩後
14:30～15:00 講義<事例紹介>
【映像視聴：15分ほど】15:10～15:20 用紙に記入。「○○したいと思っているけど、実現できない理由」＊例えば、プラットホーム、人材、お金、仲間、など。

本講座のキーワード

・北海道在留外国人
・在留資格
・外国人技能実習制度
・監理団体／送り出し機関
・外国人技能実習機構
・日本語学習会

☞本研修会の共通キーワード：①相互理解、②対等性、③協働
「外国人との共生：私たち住民は地域社会で何ができるのか」

配布資料

1，統計データ
①国籍別年齢別男女別人員調査（室蘭市）
②在留外国人統計 統計表（法務省）
③外国人技能実習生の受入状況（北海道経済部労働政策局）
2，新聞記事

振り返り

1，どんな発見がありましたか。
2，自分が思っていたことと、違ったことは何ですか。

3 会場での「ふりかえりシート」「復習シート」の全文は『報告書本編』の巻末資料に掲載している。

---

(2) 第 2 回講座 「多文化コミュニケーション―相互理解に向けて―」
目　標：多文化社会の一員であるために、「わたし」のコミュニケーションスタイルを知る。自文化に気づく。
キーワード：多文化コミュニケーション(*1)、相互理解、対等性

時間配分	講座内容	活動形態	教材、資料
(I) 13:05 ～	準備(資料配布等) アイスブレイク(自己紹介と自身の活動紹介) 文化とコミュニケーション	 グループワーク 講義、クイズ	 ワークシート(セールスポイント) PPT、配布資料
(II) 14:10 ～	 ステレオタイプ 自文化中心主義 予習シート確認 初対面の外国人に質問	 講義 講義 グループワーク(発表) クイズ、ゲーム・ペア	 PPT、配布資料 PPT、配布資料 予習シート PPT、配布資料
(III) 15:20 ～	(10 分休憩後) ことばと文化コンテキスト 夫婦の会話事例から聞くコミュニケーション 学習内容の確認	 講義 クイズ ペア・ゲーム 個人作業	 PPT、配布資料 PPT、配布資料 付箋 ふりかえりシート 復習シートは次回までの課題

*注1： 講座では、ステレオタイプ、文化相対主義、多様性への寛容、高コンテキストについての理解をキーワードとして捉えている。

【配布資料　要約されたレジュメ内容】 ―レジュメは一部省略して掲載、PPT を並行して提示。

「多文化コミュニケーション―相互理解に向けて」―【第 2 回講座要約資料】

（担当者：北海道文教大学教授　岡本佐智子）

各自が考えてほしいこと➡ ・自分を知る ・判断留保 ・文化相対主義 ・多様性への寛容

1. コミュニケーションについて考えてみよう

1.1　コミュニケーションってなんだろう

コミュニケーションの定義は、実に多くの定義があって、一つの定義で図るのは難しいのが現状。人間のコミュニケーションを人間、社会関係の基礎となるものとして捉え、人間同士の相互作用を社会の基本的単位とする視点で、「相互作用課程である」こと。そして、コミュニケーションを社会調節、すなわち説得の手段として考えられている。

1.2　コミュニケーションとは

コミュニケーションは時間とともに変化する

①コミュニケーションはやり直しがきかない（不可逆性）

②コミュニケーションは繰り返せない

③コミュニケーションは相互依存的作業である

④コミュニケーションは常にコンテキスト（文脈）を伴う

コミュニケーションに参加している人が共通の意味を創りだすためにお互いに影響しあっている。

1.3　コミュニケーションのしくみ

コミュニケーションは、ことばによるメッセージである「言語コミュニケーション」と、ことばによらないメッセージのやりとりである「非言語コミュニケーション」の媒体がある。

1.4　コミュニケーションはプロセス（過程）である

コミュニケーションは時間とともに変化する。後戻りできないし、やり直しもきかない（不可逆性）。繰り返せない。初対面は一度しかない。最初は共有する部分が少ないが、徐々に経験を共にし、新しい相手と自分を発見できれば、共感できる可能性が高くなっていく。

1.5　コミュニケーションは共同／共同作業

コミュニケーションは相互依存作業である。

コミュニケーションに参加している人が共通の意味を創り出すために互いに影響し合っている。

コミュニケーションという共同作業は双方に満足できない。

コミュニケーションには型がある。

2. 初対面の対人コミュニケーション　　*PPT でクイズとして提示し、課題解決し体験的に学習

知らない人と出会ったとき、価値観を共有したくなる。だから、共通点探しを始める。

共通点が多いと相手がどのように解釈しているか予想できることが多い。

私たちはマイナス志向（引き算）→肯定（足し算）的視点で人をみる傾向がある。

3. 対人コミュニケーションにおけるステレオタイプ

3.1　ステレオタイプ（リップマン，1922）とは、

型にはまった考え方を意味する。人は、物事を見てから定義しないで、定義してから見る傾向があり、その定義も自分の文化に基づいて行われる傾向がある。さまざまな社会的集団に対して単純化された、画一的なイメージ→マスメディアによるイメージや思い込み、先入観が強化される。これらは肯定的なステレオタイプもあるが、否定的なものは→偏見→差別につながりやすい。

3.2　マスメディアの内容の偏り

人々の外国についてのイメージや態度は、新聞、テレビ、ネットといったマスメディアで作られていく。マスコミに登場する外国、外国人の描かれ方に偏りがあれば、それは受け手のもつ外国人や外国イメージにつながっていく。新聞・テレビへの接触が少なくなっている若者達は、SNS 等の「まとめニュース」を読み、真偽を確認せずに刺激的なことやAI提供の情報ばかりに接している。

・確証バイアス：人は思い込みから自分にとって都合の良い情報ばかり集めてしまう傾向がある何かを正しいと思うと、その考えをさらに強めるための心の仕組みを持っている。

3.3　ステレオタイプと社会的現実

外国のマスコミが描く日本／日本人に、多くの日本人が違和感を覚えるが、それについて外国のマスメディアは、ステレオタイプ的日本／日本人像を強調し、センセーショナルに伝える。一方、日本のマスメディアの描く外国人／外国について、日本人はあまり違和感を覚えない。それどころか、世界中の情報が流れ込み、日本にいながら海外のことを理解していると思い込んでいる。

4．初対面の対人コミュニケーション

不確実性の回避：初期の相互コミュニケーション作用

アメリカ人が必要とする情報	日本人が必要とする情報
相手の態度、信念、価値観に関する情報。 背景よりも人物そのものを重視する。	相手の背景に関する情報。 年齢、家族、出身地、属する集団、社会的立場。
会話をふくらませたり、いろいろな話題について話したりすることにより、態度、信念、価値観に関する情報を得る。	**確認のための話題：**相手との類似性を確認（**共通性の発見**） 学生：年齢、住所、家族構成、所属、 通学手段など。 社会人：年齢、出身地、居住形態、属する集団（会社、職種、教育歴）、家庭など。 ・ウチ集団に入れるかソト集団に置くか。

初対面の人とコミュニケーションする際に、大きな障害となるのは、相手がどんな行動をとるか予測しにくい。他人同士のコミュニケーションにおいては各自が相手の人物について不確実性を減少させようと試みる。→「不確実性の回避」行動

5．日本人の外国人とのコミュニケーション

5.1　外国人が初対面の日本人から受ける質問の「なぜ」

Q：（今）どこに住んでいますか。A駅のどの辺？
Q：何歳ですか。恋人はいますか／結婚していますか。
Q：お父さん／お母さんは何をしていますか。
Q：仕事は？　給与待遇は？　時給は？
Q：わたしたち日本人にしかわからないことだから･･･わからないよね。
Q：いつまで日本にいますか。　等々。

5.2　マイクロアグレッション

相手に悪気はなかったようだけど、言われて嫌だったことばを思い出してみよう。
また、自分に悪気はなかったけれど、相手を嫌な気持ちにさせてしまったり、言わないほうがよかったな、と思ったりした経験はないだろうか。

6. コミュニケーション上手？

あなたは話すよりも聞くほうが簡単だから、「きき上手」にはなれると思っていませんか。

*ワークショップ1：「あなたのきき方」をふりかえる。

7. コミュニケーションと文化

コミュニケーションは文化であり、文化はコミュニケーションである。

8. コミュニケーションスタイル

螺旋型、飛び石型、直線型

9. ことばと文化コンテキスト

ある集団にいる人々は、同じ考え方や背景を共有していることを前提としたコミュニケーションにおける文脈／状況（コンテキスト Context）は重要な意味を持つ。

10. 異文化接触を考える

*ワークショップ2：トーナメントゲームから「あなたの異文化適応」をふりかえる

まとめ

相互理解を目指すコミュニケーションであるために、
まず自文化を知りましょう。自分のコミュニケーションをモニターしましょう。

(3) 第3回講座 「「私たちのことばと地域(方言、アイヌ語を含む言語の多様性)」

目　標: 多様な言語・方言の存在と対等性を考える。／日本語を相対化して捉える。
／共生社会における日本語の在り方を考える。

キーワード:日本語の特徴、地域のことばと文化、相互理解(*1)、対等性(*2)

時間配分	講座内容	活動形態	教材、資料
(I) 13:05～	準備(資料配布等) 予習課題の確認 日本語の位置づけ 方言とアイヌ語 第 1 講のまとめ	 グループワーク 講義 (講師と受講者の対話を含む)	 予習シート 講義資料(レジュメ)
(II) 14:15～	(10 分休憩後) 日本語表現の特徴 聞き手責任言語 vs 話し手責任言語 曖昧表現とわかりやすい日本語 第 2 講のまとめ	 講義、クイズ 講義、クイズ グループワーク 講義、クイズ	 講義資料(レジュメ) 講義資料(レジュメ) 講義資料(レジュメ)
(III) 15:15～	(10 分休憩後) 国際化と日本語の国際化 ～外国人による日本語、外国人のための日本語(やさしい日本語) 質疑応答 学習内容の確認	 講義、クイズ グループワーク 講師―受講者 個人作業	 講義資料(レジュメ) ふりかえりシート 復習シートは次回までの課題

注1～注2: 「相互理解」と「対等性」は第 1 講と第 3 講で強調したキーワードになっている。

【配布資料】

（担当者： 北海学園大学元教授　菅　泰雄）

（タイトル） 私たちのことばと地域（北海道・胆振地方・室蘭）

日本語の特徴について、地域の独自性（方言、アイヌ語等）を交えながら考える

第1講

1. 日本語の位置付け

日本語・言語に関する認識の確認。

予習課題を、受講者とともに、確認する。

言語人口による日本語のランク

日本語が「特殊な言語」といわれる原因の検討。

言語類型論からの日本語の位置付け

指示詞の体系（3項対立）、5母音の言語、SOV型の言語

視野の狭さ、エスノセントリズム

日本語が「むずかしい言語」とされるのは何故か、その妥当性の検証。

そもそも、ある言語が「むずかしい／やさしい」という基準はどこにあるのか

韓国語の例

「あいまいな言語・非論理的言語」といわれることの妥当性を検討。

エスノセントリズムとは逆の「自虐的日本語観」

谷崎潤一郎『文章読本』の言説

⇒具体的データを示し、俗説を否定し、客観的な日本語（言語）を認識することを目指す。 【日本語を知る】

2. アイヌ語

日本語とアイヌ語との関係

抱合語であるアイヌ語と、膠着語である日本語

アイヌ語の文法的特徴（抱合語とは）、母音（5母音）・子音の特徴

同じ5母音といっても、「違い」は見られる。

閉音節と文字表記について

室蘭、母恋のアイヌ語地名の由来について

3. 北海道方言について

「そだねー」についての議論を通して、「方言」に関する認識の再検討を行う。

「そだねー」が北海道方言ではないという言説に対しての検討

何を持って「方言」と見なすかの基準。

⇒受講者による検討。（意識の確認、他のアンケート結果）

方言についての見方を深めることを目指す。 【言語、方言に対する見方】

気づかない方言　世代差による方言の違いに対する見方を再認識する。【多様性】

4. 第1講のまとめ

多様な言語・方言の存在に目を向け、日本語を相対化して捉えることの重要性を理解。

言語・方言の対等性について考える。 cf. 言語の経済的価値

他文化・多文化との接触、共生にとって大切なこと

外国人と相互理解、対等に付き合うため

第一歩＝自分を知ること　日本を知ること（文化、日本語）

次の一歩＝他文化・他言語にも目を向ける。

講義2　日本語の特徴～日本語表現のタイプ～
　　日本語の特徴とされるいくつかを、例（外国人日本語学習者による誤用例も含む）
　　を通して議論する。

1. スル型言語とナル型言語
　　こちらカツ丼になります
　　社長がお書きになります／（私が）お書きします
　　扉が閉まります／扉を閉めます
　　コーヒー入ったわよ／コーヒー入れたわよ

2. 聞き手責任型言語と話し手責任型言語
　　「ツーといえば、カー」
　　「みなまで言うな、分かってる」
　　　　⇒身内コミュニケーション

3. 利益に敏感な日本語
　　どうぞ／どうか　 please　との違い
　　～くれる　～てもらう　give との違い

4. 聞き手の知識を計算する
　　終助詞「ネ」と「ヨ」：　布団干してネ／布団干してヨ。

5. 対話と共話
　　いい天気ですね。　いい天気ですね。／　＃いい天気です。

6. 話し手の気持ちが表れる表現
　　「が」と「で」：これがいい／これでいい
　　「など」と「でも」：これでも～／これなど～
　　「しか」と「だけ」：これしか～ない／これだけ～ある

7. 文法再点検　～思い込みの「文法知識」を改める～
　　「タ」：過去を表すのか？
　　　タの過去以外の用法を提示し、その認識を再検討する。
　　　北海道方言の「タ」と全国に流布した「よろしかったですか」も、
　　　取り上げ、受講者による分析・議論を行う。

　　　未来形と「～でしょう」の関係
　　　「今日は土曜日です。明日は日曜日でしょう。」の不自然さ。

　　「テイル」：進行を表す用法以外の用法について
　　　「パジャマを着ている」（二義文）
　　　「和服が似合う／和服が似合っている」
　　　「壊れた／壊れている」（日本語学習者の誤用）
　　　「三郎は酒を飲み過ぎて困る。／三郎は酒を飲み過ぎて困っている。」
　　　などの違いについて、分析し議論することを通して、日本語を再発見す
　　　る体験をする。

　　あいまいな表現
　　　美しい日本の私
　　　おいしいお米コーナー　　多義性と多義性を排除する仕組み

8. 第2講義のまとめ
　　日本語表現の特徴
　　日本語文法に対する漠然とした思い込みを見直す

あいまいな表現と分かりやすい表現
他文化共生において「常識」がもつ危険性を再認識

第3講　まとめ
共生社会における日本語のあり方を考える
国際化と日本語の国際化
多様な日本語　(1)日本語内の多様性(地域方言、社会放言)(2)外国人による日本語、外国人のための日本語　「わかりやすい日本語」

相互理解を目指し積極的にコミュニケーションをとることの重要性
間違いを怖れないこと
⇒間違った日本語でも、補正して解釈できる能力
文字表記、掲示板の表現を例に、受講者間で討議する。
カクテルパーティ効果、「バスケット　ゴリラの実験」

相互理解と対等性ということ

2. 質問への回答

3. ふりかえりシート記入

主要参考文献

安藤節子・小川誉子美著『日本語文法演習　自動詞・他動詞、使役、受け身　－ボイス－』スリーエーネットワーク
池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
池上嘉彦(2006)『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会
木村英樹(1987)「ドウゾ～(テ)クダサイ」と"萩"～「依頼表現の日中対照～」(『日本語学、1987.10 月号』明治書院)
新屋映子他(1999)『日本語教科書の落とし穴』アルク
徐一平(1994)「日本語と中国語における一語文の対照研究－形容詞一語文を中心に」『日本語研究』人民教育出版社
谷崎潤一郎(1934)『文章読本』2. 文章の上達法・文法に囚はれないこと
寺村秀夫(1976)「「ナル」表現と「スル」表現」(『寺村秀夫論文集Ⅱ』1993　くろしお出版所収)
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味　Ⅱ』くろしお出版
中川裕(1996)「アイヌ語千歳方言の人称接辞」(『アイヌ語千歳方言辞典』草風館)
中川裕・他(1997)『エクスプレス　アイヌ語』白水社
中川正之(2005)『漢語からみえる世界と世間』岩波書店
野田尚史編(2005)『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
簾智　広太(2018)「カーリング女子「そだねー」は北海道弁ってほんと？日本語学者に聞いてみた　そのブームが持つ意味とは」BuzzFeed News
森山卓郎(2000)『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房
山本秀樹(2003)『世界諸言語の地理的・系統的語順分布とその変遷』溪水社

北海道新聞(2018)「そだねー」は北海道弁だと思いますか(2018 年 3 月 19 日)朝刊
室蘭市市役所 HP

(4) 第4回講座 「「外国人とのコミュニケーション」

（担当者： 北斗文化学園日本語専任講師 佐藤公美）

目　標 ： ・外国人のための日本語学習ツールを見てみる。
外国人が何を学び、何が難しいかを考える。
・やさしい日本語について考える。／実際に外国人と話してみる。／やさしい日本語への書き換えをしてみる。

キーワード： やさしい日本語(*1)、学習リソース、対等性

時間配分	講座内容	活動形態	教材、資料
(I) 13:05～	準備、講師紹介 日本語能力について 日本語学習ツール 予習課題の確認 日本語に対する外国人の意見を聞く	 講義、クイズ 動画視聴 グループワーク 動画視聴	 PPT、配布資料 日本語学習サイト 予習シート 録画資料(*2)
(II) 14:10～	(10 分休憩後) 外国人と話してみる ふりかえり①	 グループワーク 個人作業	 ZOOM によるオンライン対談 感想をノートに記録
(III) 15:00～	(5 分休憩後) やさしい日本語の特徴 やさしい日本語への書き換え～発表 ふりかえり②(全体)	 講義、クイズ グループワーク 個人作業	 PPT、配布資料 配布資料(市の HP の一部をやさしい日本語に書き換える作業) ふりかえりシート 復習シートは次回までの課題

注 1： 「技術」の習得より「意識」を身に付けてもらうことが狙い。

注 2： 国籍、在留資格の異なる在住外国人に対し、日本語や生活についてインタビューした動画を編集したもの。

【配布資料】

今日のスケジュール

13:00～13:05	諸連絡、講師紹介
13:05～13:20	「日本語能力」について 日本語を勉強するためのツールを見てみる
13:20～13:35	予習シートの共有
13:35～13:50	日本語に対する外国人の意見を聞く(ビデオを見る)
13:50～14:00	休憩
14:00～14:35	外国人と話してみる ふりかえり
14:35～14:55	「やさしい日本語」の必要性について考える 例を見て、ベン図で比較する
14:55～15:00	休憩
15:00～15:10	「やさしい日本語」の特徴を知る
15:10～15:35	「やさしい日本語」の実践
15:35～15:40	発表
15:40～15:55	全体のふりかえり
15:55～16:00	次回の講座について

「日本語能力」について

・日本語能力試験

https://www.jlpt.jp/

・国際交流基金　日本語基礎テスト（JFT-Basic）

https://www.jpf.go.jp/jft-basic/

・ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）

https://www.britishcouncil.jp/programmes/english-education/updates/4skills/about/cefr

・JF 日本語教育スタンダード

https://jfstandard.jp/top/ja/render.do

日本語を勉強するためのツール

・「生活者としての外国人」のための日本語学習サイト

つながるひろがるにほんごでのくらし

https://tsunagarujp.bunka.go.jp/

・いろどり 生活の日本語

https://www.irodori.jpf.go.jp/

日本語に対する外国人の意見

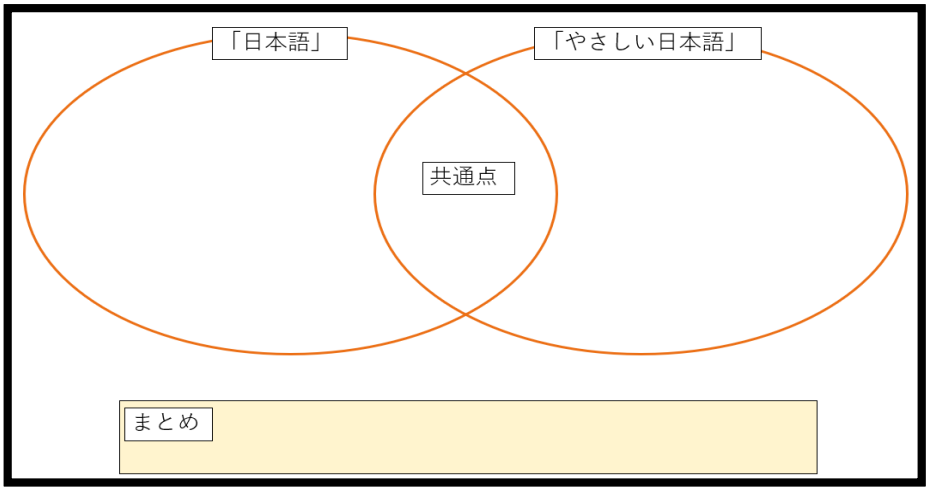
・文化庁

「日本語に対する在住外国人の意識に関する調査」

1. 日本語に対する意識
2. 日本語の能力～聞く、話す、読む、書く力～
3. 日本語学習者と日本語教室
4. 日本語教室での成果、教室への要望など
5. 日本語に対する意識など

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/zaiju_gaikokujin.html

「やさしい日本語」について考える



やさしい日本語

「難しい言葉を言い換えるなど、相手に配慮したわかりやすい日本語のことです。日本語の持つ美しさや豊かさを軽視するものではなく、外国人、高齢者や障害のある人など、多くの人に日本語を使ってわかりやすく伝えようとするものです。」

・文化庁

「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン　2020 年8 月」

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/92484001_01.pdf

---

(5) 第 5 回講座 「多文化共生の地域づくりに向けて」

(担当者：北斗文化学園日本語主任教員　中川かず子)

目　　標 ： 外国人との共生社会に向けて、相互理解と対等性を念頭に置いた協働的な活動の必要性を認識する。地域のリソースをうまく使い、具体的な活動を考える。

キーワード：共生の定義、外国人との交流、学習支援者の活動(*1)、相互理解、対等性、協働

時間配分	講座内容	活動形態	教材、資料
(I) 13:05～	準備(資料配布等) 予習課題の確認 多文化共生の理念 (①定義、②相互理解、対等性とコミュニケーション志向からの共生観)	 グループワーク 発表 講義	 予習シート PPT、レジュメ
(II) 14:00～	(10 分休憩後) 外国人居住者との意見交換(*2) まとめ(小括)	 グループワーク 発表 グループワーク 発表	(テーマ) 地域の多文化共生への課題、他地域との比較ほか意見交換、交流 個別ノート(意見内容まとめ、感想)

(III) 15:00～	(10 分休憩後) 多文化共生実践地域の事例紹介 【討論】地域の課題、何ができるか、自治体との連携等】 ふりかえり	講義 グループワーク 発表 個人作業	PPT、レジュメ ふりかえりシート

注 1： 近隣の市を含め、当該地域の学習支援者団体の最近の活動事例を紹介した。

注 2： 各地域に在住する留学生、国際交流員に参加してもらい、日本語や生活上の困難点、地域の課題等について質疑応答や意見交換を行った。

【配布資料】　PPT を提示しながら、以下のレジュメを参考資料として使用

多文化共生社会に向けて～共生/多文化共生の定義と実践地域の事例

I. I-1 「共生」あるいは「多文化共生」の定義

1) 総務省による「多文化共生」の定義

「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」(2006 年報告書)

2) 社会学研究者による(外国人との)「共生」の定義

西澤晃彦(1994 年;「『共生』の社会過程」『来日アジア・アフリカ系外国人の生活適応と日本人との共生に関する研究』)―「外国人を始めとした社会的弱者に置かれた層の自主的な社会参加が促進された状態」➡「社会的弱者」の社会参加

都築くるみ(1998 年;エスニック・コミュニティの形成と「共生」～豊田市 H 団地の近年の展開から)―「一つの社会で、複数の異質な文化集団が、相互の生活習慣や下位文化を理解し、互いに尊重しつつコミュニケーションをもち、対等な関係を形成している状態」➡相互理解と対等性を形成するコミュニケーション

このほか、小内透(1999 年)「共生概念の再検討と新たな視点」では「共生」概念を生態学的、社会学的な視点から捉え直し、共生の定義に広く影響を及ぼした。

I-2 共生の類型――以下は、大槻茂美(2011)が「共生」を「対等性」と「コミュニケーション」の二つの軸で分類したものである。

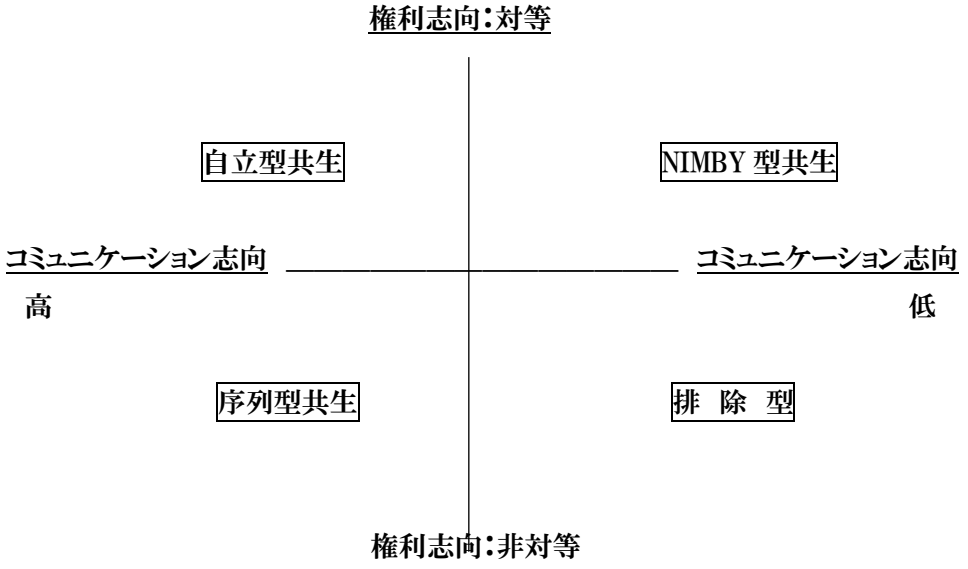


図1 共生の概念図式 【大槻茂美（2011）「共生社会―自立型共生の理想と困難」『外国人のまなざしと政治意識』勁草書房、pp.68-89】より

①**自立型共生**――外国人も日本人と同様の権利を持つことを支持し、自分自身もまた外国人とのコミュニケーションを志向する人々。

②**序列型共生**――自分自身は外国人とのコミュニケーションを持つことは志向するものの、外国人も日本人と同等の権利を持つことは支持しない人々。社会的強者の「寛容さ」に基づく共生。

③**NIMBY*型共生**――*Not In My Backyard の略。外国人も同等の権利を持つことを支持するものの、自分自身は外国人と積極的に交流を持つことは志向しない人々。「回避的人種主義」に基づく共生の考え方に通ずる。

④**排 除 型**――外国人も日本人と同等の権利を持つことを支持せず、自分自身も外国人と積極的に交流を持つことを志向しない人々。

【参考】上記の分類のもとになったアンケート(質問)項目

○**権利の対等性**――「あなたは、日本に住む外国人の権利や生活支援体制に関して、どう思いますか。外国人も日本人と同等の待遇や権利をもつべきである。」に対し、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の 4 択回答

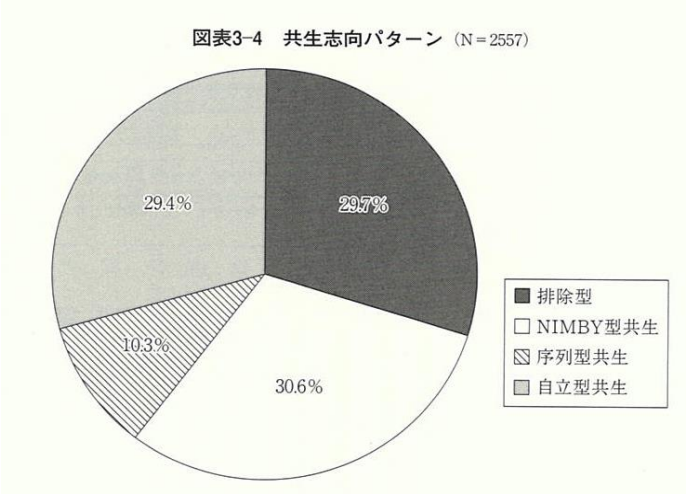
○**コミュニケーション志向**――「今後、日本に住む外国人の助けになるようなボランティア活動に参加したいですか」➡自発的な相互関係の形成を志向するかどうか

「参加したい」「どちらかといえば参加したい」「あまり参加したくない」「参加したくない」

大槻（2011）の調査結果（2003~2006 年までの住民意識調査）では、以下のように、「NIMBY 型共生」が 30.6％、「排除型」が 29.7％、「自立型共生」が 29.4％、「序列型共生」が 10.3％となり、多文化共生社会に相応しい自立型共生を望む住民は約 30％だった。

図 2　大槻論文(2011)で示された「共生志向パターン」

住民の意識変数：愛国主義、純化主義、外国籍居住者の割合、職種、生活満足感、交流経験、生活に対する満足感、外国籍住民の割合など　（例）外国人との交流多い⇒自立型共生／高学歴⇒序列型または自立型共生／生活満足感低い⇒排除型／愛国主義・純化主義⇒排除型、序列型共生の傾向



II.「多文化共生」実践地域の事例【北海道恵庭市と苫小牧市の例】

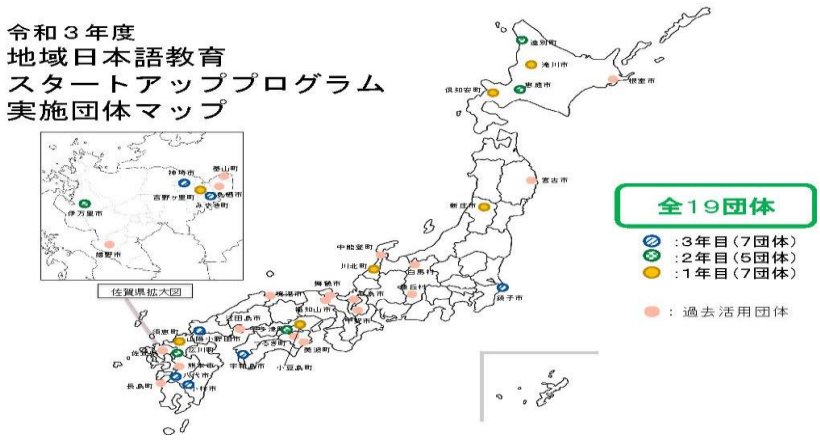
II-1　恵庭市の実践事例（2020 年 2 月、市企画課職員からの聴き取りによる）

恵庭市は、令和 2 年度から、文化庁の「生活者としての外国人のための日本語教育事業」に申請、道北の遠別町と共に採択された。「空白地域の日本語教室」事業を中心に活動を行ない、現在も事業は継続されている。

令和 3 年度から、新たに、滝川市と倶知安町が採択され、主として日本語教室の開設を中心に、在住外国人との共生のための活動を進めている。

＊恵庭市――人口 70,331 人(2020 年 12 月調査)、外国人数：494 人(2020 年2月調査時)【技能実習生 207 人、留学生 82 人、技能・国際業務・人文知識等 37 人、その他、永住者・特別永住者、家族滞在、配偶者等】／恵庭市国際化推進プランの一環として実施。／事務局：市企画課、商工労働課／構成メンバー：技能実習生受け入れ企業、関連団体（商工会議所、JA、町内会、国際交流団体、大学、専門学校ほか）、外国人居住者

（文化庁「日本語教育スタートアップ事業」HP より）



【参考】2020 年 2 月に実施した「恵庭在住外国人へのアンケート」結果(市 HP より)

アンケート協力者 122 人中、(1)国籍(フィリピン 67 人、ベトナム 32 人、ネパール 18 人ほか)、(2)年代(20 代 85 人、30 代 32 人ほか)、(3)最も身に付けたいこと【複数回答(①日本語能力 79 人,②生活習慣 72 人,③仕事の技能 66 人,④生活情報 30 人,ほか)(4)恵庭市の生活で困っていること【①言葉 62 人、②気候 45 人、③ゴミの出し方 15 人、④文化 13 人、その他、「冬季間は移動が難しい」「場所の漢字の表記が難しい」など】

Ⅱ-2 苫小牧市の 試み～多文化共生の実現に向けて(主催:市総合政策部国際リゾート戦略室)

●苫小牧市「都市再生」プラン(令和 3 年 3 月策定)の要素の一つ:

➡「人材育成・多文化共生」【国際交流推進による多文化共生の実現】

1)生活・コミュニケーション支援――行政・生活情報の多言語化 ・ 相談体制の整備 ・ 日本語教育の推進

2) 地域活性化の推進――外国人労働者の雇用環境整備 ・ 観光客の受入環境整備 ・ シティプロモーション施策の強化

3)多文化共生の地域づくり――地域社会への意識啓発 ・ 自立と社会参画 ・ 関係機関等との連携・協働

4)グローバル化への対応――グローバル人材の育成 ・ 留学生の支援 ・ 外国人材の活用

○苫小牧市「多文化共生の実現に向けて」～市内の活動団体の意見交換会(2022 年 1 月)

講演:「多文化共生の実現に向けて～外国人採用セミナー」(キャリアバンク株式会社)

意見交換会:「北海道多文化共生 NET(日本人支援者の育成とやさしい日本語の普及)」/「久恵比寿(ひさえ日本語学校設立準備)」/「北洋大学(大学における多文化共生の使命)」/「苫小牧工業高等専門学校(外国人技能実習生を対象とした防災教育の実践)/「北斗文化学園(外国人留学生に対する職業教育)」ほか、市役所総合政策部国際リゾート戦略室、商工会議所、観光協会、市産業経済部工業・雇用振興課等が参加。(以下に、「苫小牧高専」の活動内容の一部を紹介)

活動内容

2020年10月～12月:国内外の災害・防災に関する調査

・ 文献調査、苫小牧市市民生活部危機管理室への聞き取り調査

2021年1月～2月:外国人技能実習生へのアンケート調査

・ 苫小牧高専協力会企業約200社にアンケート協力依頼
・ **防災の基礎知識、母国での災害の経験・日本語能力**などを調査

2021年2月～6月:外国人向け防災教育コンテンツの作成

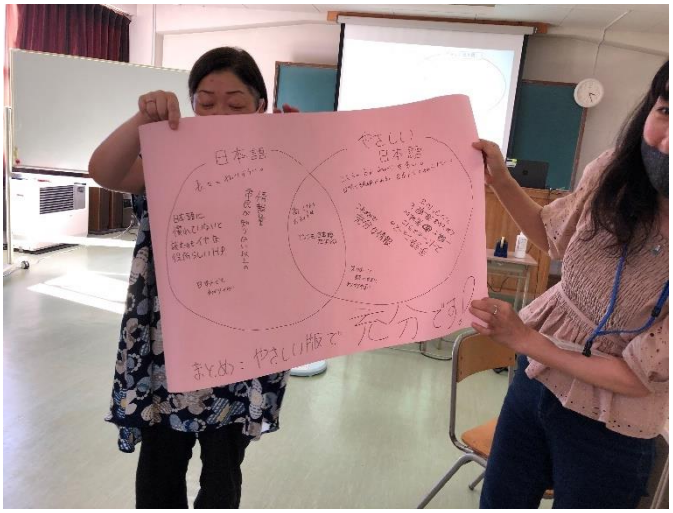
・ 本校留学生を対象とした防災教室の試行的実施
・ **外国人技能実習生への聞き取り調査**(市内協力企業にて)

本日の講座の流れ：

⑴13：05～13：55　多文化共生の地域づくりのために
グループ意見交換（予習シート）＋ミニ講義（20 分程度）
①多文化共生の定義（2006 年総務省推進案／社会学者による）
②相互理解・対等性とコミュニケーション志向から見た共生観
-----住民への「外国人との共生意識」調査を基に
⑵14:00～14:30　外国人居住者*との話し合い*（共生社会に向けて）
14:30～14:50　まとめ（小括）～休憩
⑶15:00～15:40　多文化共生実践地域の事例紹介（20 分）～*グループ討論*
（テーマ）：地域の課題を探り、多文化共生の地域づくりに
何ができるか、自治体との連携をどうするか
15:40～16:00　ふりかえり、次週予告（フォローアップ講座）

3. 受講生の講座運営に対する反応、評価

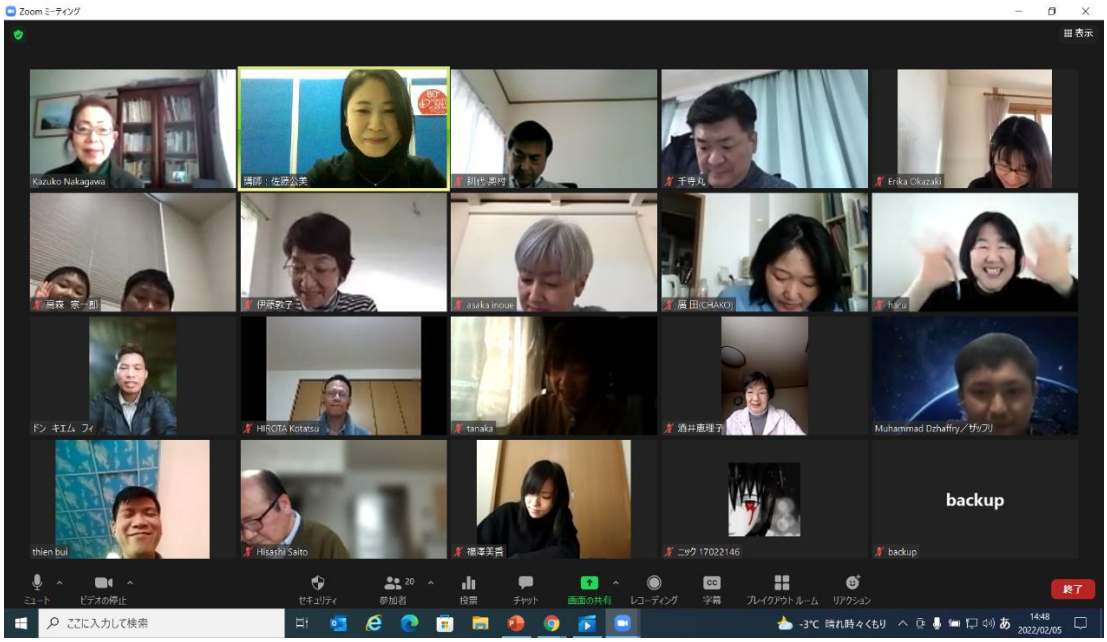
（1）ワークショップ形式の講座への反応――会場によっても多少の違いが見られたが、受講生の参加目的がほぼ共通で、地域の多文化化に貢献したいという動機づけがあるため、参加型講座に対する理解はあったと感じられた。講師の中には、緊張感を解く意味で、アイスブレーク的活動から始める講座もあった。グループ・ペアの活動についても、受講生は講師の指示に従い課題と真剣に取り組んでいた。



活動は様々で、課題について個人、グループ、ペアで意見を出し合う、討論する、といったものから、ペアでロールプレイをする、外国人を交えて意見交換する、質問する、等の活動が見られた。

一方、事情によりオンラインの講座に変更になった時は、活動も

変えざるを得なくなるが、上の写真では、受講者がチャット機能を用いて全員に「意見、感想」、また講師には「質問」といったメッセージを送っているところである。受講生、講師がオンラインに馴染んでいる場合は、オンラインの便利な面を活用できる。また、グループ討論の場合は「ブレイクアウトルーム」を利用して行われていた。 いずれも、受講者は大きな問題もなく、活動に参加できたと思われる。ただ、受講生が機器の操作に不慣れであったり、インターネット環境が十分整備されていない場合は、オンライン講座の運営は難しい。



また、今回の研修で対面、オンラインを問わず、後半の講座（第 4 回、第 5 回）で外国人と日本語で話し合う機会を設けたところ、受講者から「日本語の難しさがよくわかった」「相手がわかるように話すことは難しい」「生活していても言葉や文化の苦労がある」「直接話せてよかった」等、外国人がいかに日本語や生活上の困難さを感じているかを実感できたと評価する声が多かった。特に外国人との接触経験があまりない住民には大きな体験的学びとなったようだ。

⑵「ふりかえり」教材を重視した研修の成果

先に述べたように、本研修では全講座を通して、教材として「ふりかえりシート」「復習シート」を使用し、講座内外でのふりかえり行為の言語化を受講生に実践してもらった。その結果、どのような成果が見られたのか、検証を試みることにする。検証の方法として、(I)各会場の講座 1～5 回の【ふりかえり(「ふりかえりシート」と「復習シート」内容)】、(II)各会場の研修終了後のアンケート、から、成果と見られる共通点をいくつか抽出してみた。
【「ふりかえりシート」と「復習シート」の全文、および、会場別のアンケート結果全文は本報告書(本編)の巻末資料に記載されている。】

(I)【講座 1～5 回のふりかえり・復習シートの内容から～以下の 4 項目を抽出】

・外国人住民の文化、背景の理解――「理解した」「就労系(技能実習生)が意外と多いのに驚いた」「もっと知りたい」「この地域で生活するときの難しさ」「これからもフォローしたい」「一緒に彼らの国に行ってみたい」「地域に溶け込む課題を解決したい」

・外国人とのコミュニケーション――「相手を理解しようとする気持ちと行動が大事だ」「多様性を受容し、認め合うこと」「相手に興味を持ち、よく聞くことで共感的態度を」

・外国人と日本語でのコミュニケーション――「相手の立場を意識する姿勢、共感的態度が重要」「外国語と文化の違いを意識した日本語文書の作成が必要だ」「相手への理解を踏まえ、伝えるための工夫を考える必要がある」

・外国人住民の生活、日本語等の課題――「生活上の困難さを感じた(公共交通機関が不便、日本人との交流が少ない、相談者が近くにいない、等)」「日本人の間接的な話し方が難しい」「実現可能な交流機会を増やし、孤立化させないことが大事だ」

(II)【講座後のアンケート結果から分類～講座を通して、意識の変化、気づき、学びを自覚した点など】

・外国人とのコミュニケーション――「これまでの自身のコミュニケーションの問題に気づき、今後は外国人との交流にもいかしたい」「(異文化)コミュニケーションの取り方の難しさを感じた」「外国人に接するときの態度に気をつけたい」

・日本語によるコミュニケーション――「日本語の難しさを再認識、やさしい日本語の必要性を実感」「やさしい日本語の言い換え術」「日本語教育の奥深さ、必要性」

・外国人住民の生活の課題――「留学生の生活の困窮実態」「市民との交流がなく、孤立」「日本語の難しさ」「外国人との交流を行政とも協力して進めたい」

上の(I)について、受講生の「ふりかえり」記述から、「外国人住民の文化、背景の理解」「外国人とのコミュニケーション」「外国人と日本語でのコミュニケーション」「外国人住民の生活、日本語等の課題」の4種類の「気づき」や「発見」が示された。さらに、積極的に支援を表明するものであったり、意見や提言、行動の促しといった、次の段階に進む姿勢を感じさせるコ

メントもあった。(II)について、3 会場のアンケート結果から 3 種類の「意識の変化・学びの自覚」が示された。(I)と重なるが、「外国人とのコミュニケーション」「日本語によるコミュニケーション」「外国人住民の生活の課題」について、受講者の意識に変化が生じたことが繰り返し述べられていた。

本報告書『本編』でも述べているが、本研修の目的は「多文化共生社会に向けての意識醸成」、特に、「相互理解」「対等性」「協働」の意識を根付かせることである。「ふりかえり」教材は、少なくとも、研修参加者の意識醸成、成長につなげられたのではないかと考える。

4. 課題と展望

本研修では共通教材として「ふりかえりシート」・「復習シート」という 2 種の「ふりかえり」記録が使用された。これまで述べたように、各講座では担当講師によって多少異なるが、「講義・動画視聴、PPT・グループワーク(意見交換、共同作業等)・個人作業」といった活動形態で進められた。どの講座も受講者は主体的に講座に参加し、思考・判断を行い、表現することが促される。講座の最後に「ふりかえり」を行い、次回の講座までに生活の中で「ふりかえり」行為を続ける、ということを繰り返して求められた。その結果、最後まで講座に参加できた人達は、自己評価として、「達成できたこと」「達成できなかったこと」「課題は何か」をある程度把握することができたと思われる。ただ、今後の課題としては、明確な評価基準を明示し、客観的な評価を示すことが必要になることもある。例えば、こうした体験的学習を主体的に進め、受講者の成長過程を図る評価として、ルーブリック評価法等が活用できる。受講生自身も、講座の目標と自身の学び、成長を評価することができる。これにより、「相互理解」「対等性」「協働」という観点とともに評価できたら、より客観的な結果が得られると考えられる。

次の段階として、受講者が「達成できなかったこと」をどこまで、どうやって実現できるようにするかを救い上げる体制が望まれるところである。興味・関心があり、意欲的な今回の受講者達の能力とエネルギーを生かし、地域の日本語学習支援者の拡がりを目指したい。

引き続き、胆振地域では外国人住民がさらに増えてくる状況の中で、自治体とも連携して地域の日本語学習支援者の育成に取り組んでいくことが求められる。